

## 留学生別科とは何か ③

### —来日直後からの生活指導とその重要性—

#### What is a Japanese Language and Culture Course ③

#### Life guidance immediately after arrival in Japan and its importance

梶原綾乃

#### 要旨

留学生教育は来日直後から始まる。2022 年度春、コロナ禍による規制がようやく解けたが、来日が遅れる留学生が続き、開講日を1 か月ほど遅らせることになった。その間、来日する留学生たちの生活指導をしながら、来日直後の留学生の様子を観察する機会が得られた。市役所や郵便局へ引率する過程で、彼らが何に興味を示し、何を学ぶのか。また留学生を対応する周囲の日本人が、どのように変化をしたか。その一連の行為と影響は、まさに日本社会へ参加する過程であり、正統的周辺参加でもあった。

また留学生との Messenger でのやりとりをとおして、日本に適応する過程で、生活において何が問題になるのか、気づかされたことを報告する。

**キーワード:** 来日直後 生活指導、正統的周辺参加理論、SNS Messenger

## 1. はじめに

2022 年、筆者は日本語教育における生活指導の重要性を説いたが（梶原 2022a, 2022b）、折しもその年の 9 月、新聞・ニュースで、とある日本語学校が話題になった。日本語学校の職員が、外国人留学生を金属製の鎖で拘束するなどの人権を侵害する行為があったとして、入国管理局（以下入管）は、その学校を日本語学校として認める告示を抹消処分したというニュースだった。これらの行為は言語道断であるが、日本語学校の専任経験がある筆者としては、なぜ、そんな行為に至ったのかは、正直推測できた。おそらく、職員は留学生が「消える＝行方不明」になることを恐れたためだと考える。

日本語教育機関は、入管から「適正校」として認められることに腐心している。留学生の在籍管理が適正に行われていると認められた機関のみに与えられる「適正校」選定。在籍する留学生が在留許可の申請を行う際に提出書類の一部が省略されるなど、手続の簡素化の対象となり、新規入学生にもその影響があると考えられているからである。逆に「非適正校」と見なされると、入国やビザの更新等の申請をしても、入管への提出書類が増え、許可が下りにくくなる。そもそも在籍管理が適正かどうかという基準は、以下のとおりである。

(ア) 前年 1 月末の在籍者数に占める問題在籍者（前年 1 月 1 日から 12 月 31 日までの 1 年間に於いて次の①から⑤までのいずれかに該当した者のことをいう。）の数の割合（以下「問題在籍率」という。）が 5 パーセント以下であること。ただし、前年 1 月末の在籍者数が 19 人以下である場合は、問題在籍者数が 1 を超えないこと。

- ① 不法残留した者
  - ② 在留期間更新許可申請が不許可（修学状況の不良等在留実績に関するもの  
に限り、当該申請に関し、申請どおりの内容では許可できない旨の通知を受けたものを含む。）となった者
  - ③ 在留資格を取り消された者
  - ④ 資格外活動の許可を取り消された者
  - ⑤ 退去強制令書が発付された者
- （以下略）

つまり、出席率が低くビザ更新できない留学生、犯罪を起こし強制帰国になった学生、行方不明の学生が全体の 5 パーセントを越えた学校は、入管から「適正校とは認められない（非適正校）」と通知され、3 年連続で受けた場合、留学告示からの抹消基準に該当されるのである。

留学生の行動一つで、学校の存亡にも関わることになる。そのため、生活指導を担当する予備教育機関の教職員は、日本語も日本の社会も知らない外国人留学生の生活指導に力を入れるのである。しかし、井上・鈴木（1996）が示唆したように、来日 1 年間の留学生は、肉体的にも精神的に不安定になりがちである。特に金銭的不安が原因で、過度のアルバイトに走って学業がおろそかになったり、欠席がちになったり、知人の紹介でうっかり犯罪

に加担してしまったりすることも少なくない。それらを防止しようとしたあまりの職員の行動だったのではないかと推測する。

もちろんこの職員を、この職場を処分することに異議はない。だがこの問題をこの学校の問題にすぎないと、矮小化することに異議を唱えたい。これらは、氷山の一角である。「だから入管がもっと厳しくしろ」というのではなく、この教職員が、この職場が、なぜ、このような行為に至ったのか、そこを検証するべきである。

過去に生活指導を担当する教職員と話し合う機会があったが、彼らとの議論の多くには「問題学生にどう対処すべきか」という意識が見られた。そもそもの図式が「日本語学校 VS 問題がある留学生」という二項対立の発想である。学校や日本社会のルールでふるいにかかけ、そこからはみ出したものを、どのように矯正、更生させるか、どのように排除するか、そういった前提があるからではないかと、筆者は推測する。予備教育機関における生活指導が、日本人が敷く制度への従順を外国人留学生に強いる形になっているのではないかと考える。

このように日本語教育における生活指導を、教育学、社会学、心理学、異文化間教育の視点から、学術的に捉えなおす必要があるというのが、筆者のねらいである。

## 2. 2022 年度前期 朝日大学留学生別科の様子

梶原（2022 b）では異文化適応に関する理論や正統的周辺参加理論、アクター・ネットワーク理論を用いて生活指導の可能性を説いたが、その多くは「キャリアデザイン」という授業を通しての実践報告であった。だが留学生の生活指導の多くは、来日直後の授業がないときから始まっている。そこで、2022 年度 4 月より、朝日大学留学生別科に入学した留学生 28 名を対象に行ってきた生活指導の様子を報告する。

その前提には、正統的周辺参加理論を適用し、日本社会という共同体に参入する過程を観察することで、「VS 留学生」ではなく、留学生を新参者と見なしスムーズに日本社会に適応させていく流れを作っていきたいと考えている。

2022 年 3 月、朝日大学留学生別科（以下、別科）は、17 名の留学生を修了式で送り出し、在籍留学生がゼロになった。だが、2022 年 4 月、約 2 年間のコロナ期間を待ち続けた新入生 28 名がやってきた。先輩がいなくなった別科は、新たに一から始める機会を得ることになった。

コロナの感染流入を恐れていた政府が、やっと留学生を再び受け入れることにした 4 月、留学生の入国は混乱を極めていた。入手が難しかった飛行機のチケットをとっても、PCR 検査（以下検査）の陰性証明がなければ搭乗できず、仮に到着しても、再び空港で検査が待っており、陽性とみなされると最寄りのホテルで待機せざるを得なかった。また出身国によっては、検査の結果を問わず、ホテルや寮での数日間の待機期間を設けなければならなかった。別科は入学予定の 28 名がおおよそ揃う 5 月末まで、授業の開講を 1 か月遅らせることにした。従来開始する 4 月 7 日の一か月後、5 月 11 日（初級クラスは 5 月 25 日）を授業開始日とした。

一か月開講日が遅れて別科教員が暇になるかという、そうではなかった。五月雨式にやってくる留学生を迎えるための例外的な業務に追われることになった。

そもそも朝日大学には、国際交流センターなどの留学生に特化した部署がないため、学内の部署と別科教員と協働で対応してきた。従来、空港まで留学生を迎えに行くのは、入試広報課の仕事だったが、このころ大学から一番近いセントレア空港は、一部の国にしか開かれておらず、他の国の留学生については関西空港や成田空港まで迎えに行かなければならなかった。別科以外の他学部、他部署は4月から通常業務のため、入試広報課の人手が足りず、別科教員もバスに乗って成田空港や関西空港まで迎えに行かなければならなかった。また無事に寮についたところで、出身国によっては5日間の待機期間が求められ、その間、留学生はWi-Fiもない寮に籠らなければならず、また別科教員も自宅待機期間中の食事を配達しなければならなかった。そんな異例づくめの新学期、待機期間が明けて、ようやく留学生が別科事務室にやって来るのである。

今回、留学生の来日直後から日本の生活に慣れるまでの経緯を、生活指導の立場から記録し始めた研究だったが、当初から異例続きだった。だが、別科の在学生在がゼロになったこの時期だからこそ見えてきた留学生の様子と筆者の対応を報告する。

### 3. 来日直後の指導

別科の事務室にやってきた留学生が最初に行わなければならないのが、市役所に行って住民登録をすることである。その際に、国民健康保険の加入、国民年金の加入と20歳以上の学生は年金支払いの免除手続きも行う。さらに、健康保険証は数日後に自宅に郵送されるので、郵便局に行って住所登録もしなければならない。

次に留学生が求めるのは銀行口座開設と携帯電話のSIM契約、そして自転車購入である。銀行口座はアルバイトをするつもりならアルバイト料の振込先として、またSIM契約する際は、クレジットカードを持たない留学生には毎月の引き落とし先として必要だった。

さらに、朝日大学周辺を移動する際には、自転車は必須である。今回のように寮から大学、市役所、郵便局、銀行・・・と移動すると何キロも歩くことになるため、留学生は自転車の必要性を強く感じるようになる。住民登録、口座開設、SIM契約そして自転車購入。これらを満たして、ようやく留学生活が始まる。

しかし、その手続きだけでも、かなりの労力を要する。

まず日本語力が十分でないのに、来日直後から最低6,7回は、自分の名前と住所を書かなければならない。かながやっとの留学生になると、住所の漢字はまるで記号か絵のようであった。

また、書きまちがえるとそのたびに訂正印を求められ、印鑑を持たない留学生たちは、その都度職員の指示にしたがって、サインをしなければならなかった。

移動時大変である。自転車を持たない留学生を連れて行くときは、大学から市役所まで歩く。そこから郵便局は比較的近いが、SIM契約や自転車を買いに行くためには、さらに数キロ先の店まで歩いていかななくてはならなかった。

目的地へ行く道中、学生と日本語でいろいろ話す。もちろん全く通じず沈黙の時間もあるが、その際の学生の様子を観察するのも興味深い。

歩いているとき、やたらと住宅地の写真を撮る学生がいた。プライバシーの問題もあるので、なぜ写真を撮るのかと尋ねると、「先生、ドラえもんの家がたくさんあるから、国の友

達に見せたい」ということであつた。なるほど、日本では当たり前の住宅地も、彼ら留学生からすると、漫画「ドラえもん」に出てくるのび太の家そのものであり、それはまさに日本社会の象徴なのだ。

また、道中、学生から「あれは、何ですか」と質問された。それはごみ収集場であつた。使えそうなプラスチック製のゴミがたくさんあつた。この機会を利用して、分別ゴミの話、捨ててあるものを勝手に持って行かないことなどを説明した。

日本の交通ルールも自然に身につけていった。数人の留学生を引率していたとき、みんなに追いつこうと歩道の外を歩く学生がいて注意をした。彼らから見ると、歩道の縁石やラインの意味がわからないのである。

筆者は引率の際は必ず歩道を歩き、交差点で止まるようにしている。押しボタン式信号の交差点では、車がなくてもボタンを押すようにしていた。教員が当たり前のようにふるまうと、留学生たちもそれをまねる。帰り道を覚えているか確認するために、学生を先頭にして歩かせると、歩道を歩き、自然と交差点で止まり、押しボタンを押していた。また帰りは穂積駅から朝日大学のバスに乗ることもあつた。そのときは、バスを待つ間、時刻表の見方を教え、乗降時には運転手に挨拶するよう指導した。

市役所や郵便局で待っている間も、目につく漢字やかなを質問してくる学生もいた。市役所の番号札発行機が故障しており「使用中」の紙が貼られていた。「先生、これはどういう意味ですか」と質問してきたので読み方と意味を教えた。次に、郵便局に行くと、偶然同じようにATMにその紙が貼られていた。「先生、これ、シヨウチュウシですね」とうれしそうに指さしていた。

#### 4. SNS から見る留学生からの相談

留学生活が始まって、最初の数か月は疑問と混乱の繰り返しである。前述のように、朝日大学には留学生に特化した部署がないので、教員が対応することが多い。そこで、今回は Facebook の Messenger でつながった学生たちのやりとりから、来日直後の学生が何に困るかを報告したい。

対象： 2022 年 4 月入学生で、Facebook の Messenger でつながった留学生 27 名  
(1 名は LINE のみ。今回は対象とせず)

期間： 2022 年 4 月 1 日～2023 年 2 月 7 日

集計結果： 423 件のやりとり

(1 件のやりとりで、3, 4 往復から、2, 30 往復まである。)

うち、学生からの連絡は 125 件 (全体の 30%)

前述のとおり、別科では来日する学生が遅れるため、授業開始日を遅らせた。4 月の 1 か月間は授業がなく、別科に来る必要がなかったためか、多くの問題を Messenger で聞いてきた。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
学生から	16	23	21	11	5	13	16	7	4	8	1	125
全体	38	68	52	31	28	35	51	55	24	34	7	423
頻度	42%	34%	40%	35%	18%	37%	31%	13%	17%	24%	14%	30%

表1 Messengerでのやりとりの回数

表1のとおり、やはり4月から6月にかけて、留学生からの相談が多かった。内容も生活についての相談がほとんどであった。以下、相談の多い内容順に報告する。

### 寮設備の問題

コロナ期間中に、入寮者がいなくなってしまったため、電気やガスの不具合の問題が増えた。また、大学で寮の管理担当職員が一人だけなので、学生たちはなかなか会えず、筆者が間に入るようになった。

水漏れやガスがつかないこと、電気が点滅しつづけること、それらをあらゆる手段を駆使して、留学生は伝えようとしてくる。SNSの利点は、文字情報はもちろんだが、写真や動画を送ることができるので、実際にどのように水が漏れているのか、どのように電気が点滅するのか、一目瞭然と事態が理解しやすい。教員はその状況を大学の担当職員に連絡し、修理までのおおよその時間、業者の来訪時間などを教えてもらい、それらの情報を留学生にわかりやすい日本語で伝えることにしていた。

また今回、先輩がいなかったために、寮の洗濯機の使い方がわからないという問題が起こった。そこで、筆者は実際に寮に行き、洗濯機の電源の入れ方から、どのような手順でボタンを押すのか、一連の動画を撮影し、学生に送った。これらもSNSがあったおかげで、簡単に意思疎通ができた事例である。

### 郵便物や業者からのメールの問題

国民健康保険証は、加入後数日後に簡易書留で送られてくることになるが、留学生が不在の場合、不在票が投函される。しかし、不在票の意味がわからないため、放置されたり、捨てられてしまうことが多かった。そこで、学生の不在票を参考資料として写真に撮り、この紙が来たら在留カードを持って、郵便局に行くようにSNSで指導した。

また留学生の携帯に「こんなメールが届いたがこれは何か」という質問も何件かあった。いくつかは、携帯の使用状況に関するメールであったが、中には詐欺メールもあった。画面を読み、何の意味かを伝え、どうすればいいかをそのたびに説明した。

### 換金、送金等の問題

この件は筆者も驚いたのだが、2022年4月現在、岐阜県内で外貨を円に換えるところがなくなっていた。学生がドルを日本円に換金しようとしても、わざわざ名古屋まで行かなければならなかった。また、換金問題で、岐阜市在住の外国人が留学生の円の換金のために寮を訪問するという情報を耳にした。同国人であることで助け合うことは大切ではあるが、中にはそれを商売にする同国人も少なくない。母国では警戒するはずでも、外国で母語が



通じるとなると、すっかり頼りきってしまうこともある。金銭に関するがゆえに身元がはっきりしない外国人が寮を出入りすることに、別科としては警戒していた。しかしどうやら交渉が決裂したようで、来日して数日後、留学生たちだけで、初めて電車に乗って名古屋に換金しに行くことになった。その際、駅での切符の買い方を駅に着いた学生たちに遠隔で指導し、無事に彼らは名古屋で円に交換できたようである。名古屋から穂積駅に戻ってきた学生のメッセージから、達成感が見て取られた。

母国から仕送りしてもらおうと銀行に行ったが、来日して6か月過ぎていない留学生には、海外送金が認められないという。また国内の親戚から送ってもらおうとしても、国内送金も認められなかった。コロナ禍の中、法律が変わったらしいのだが、学生が相談して来なければ、気づかない問題だった。結局、学生は、来日した父親の知人に会うことができ、仕送りを得たようであるが、今後この点に関しては、指導方法を考えておきたい。

### 病気やけが、欠席に関する連絡

やがて留学生活に慣れてくると、疲れが溜まり、体調を崩す学生も出てきた。特に、コロナ感染の心配もあったため、体の不調がある際は遠慮なく Messenger で連絡するよう伝えてあった。予備教育機関における留学生にとって、出席率は次のビザ更新のためには意識しないといけない問題ではあるが、連絡があった際は、まず熱があるか、下痢などがないかを確認してから、2日以上不調なら病院に行くことを勧めた。出席率も心配だが、何よりも健康である。そのためには、Messenger の文面は、体調の辛さに対する共感や同情を示し、出席率よりまずは健康を気遣う文面にして、学生が安心して連絡しやすいように心がけた。

## 5. 考察

### 来日直後の生活指導はロールプレイングゲーム

来日直後の生活指導の一連の行動は、教員にとってはまさに一種のフィールドトリップであり、外国人留学生にとっては冒険であった。初めて日本を歩く留学生にとって、知らない街は不安であると同時に目に映るもの全てが珍しい。そんな不安で疑問だらけの道中、常に質問ができる日本人がいるという形は、まさに日本社会という共同体に参入する最初の指導だと考える。

例えば、市役所で学生本人に何度も名前や住所を書かせる行為は、教員が代わりに書いたほうが早いのだが、留学生本人が書いていくことで、日本の書面主義を体感させ、今後、寮を出る際に必要な手続きをこの段階で体験しておくことに意義があると考えている。それは、名前と住所を何度も呪文のように書き、留学生活のゲートを自らの手で開く行為でもある。

日本の住宅やごみ集積場、押しボタン式信号、バスの時刻表、「使用中止」の紙・・・これらは、状況に埋め込まれており、学生自身が主体的に拾って学習していく。目的地に向かって歩く道中に、今後の生活のヒントを見つけ出す。「留学生は、『ゴミ収集の知恵』をゲットした」のである。実際、1日で銀行通帳、SIMカード、自転車購入ができたとき、留学生たちは日本で生活するための武器を調達したように誇らしげだった。「留学生は移動のための自転車をゲットした」まさにロールプレイングゲームの一場面であった。

学生の引率は体力的には大変な業務だったが、彼らの目から見える日本社会を知ることは楽しく、彼らのゲームに協働で参加しているような気持ちになる。毎回フィールドトリップだと考えると、非常に有意義な時間である。

またそれらの経験があったからこそ、名古屋に留学生だけで換金にも行くことができたのではないだろうか。付き添いの日本人はいないが、困ったことがあればすぐに Messenger で質問ができるという安心感が彼らを行動的にさせたのではないかと考える。

## 外国人留学生が及ぼす日本人への影響

引率してわかったことは、市役所でも郵便局でも、日本語が十分ではない留学生相手では、職員にかなりの手間をかけてしまっているということだった。だからといって引率教員が通訳になれるわけではない。それでも、隣に日本人がいるだけで職員は安心するようである。

面白いことに、引率教員が留学生たちに、やさしい日本語で話している様子を見て、次第に職員たちも、やさしい日本語で話すようになっていく。数人の留学生を連れて行くときは筆者も手続きを手伝う。筆者自身も、次第に市役所や郵便局の職員と仲良くなっていった。

今回は、2 か月間で 10 回近く訪れたこともあり、効率的に手続きをするための方法などを、職員と相談することができた。市役所では、予め来日留学生の数を伝え、必要な書類を予め入手し大学で書かせることにした。また訪問する前に在留カードとパスポートの写真を FAX することになった。銀行で口座開設をする前には、インターネットで、口座開設申請用紙を作成することもできるようになった。留学生の母語で書かれた指示に従うだけなので、難しい質問も簡単に終わらせることができるようになった。

その後も、別件で市役所や郵便局から留学生の対応に困って、お電話をいただき筆者が対応するということが何度かあった。他方、別科からの質問や相談に関しても丁寧にアドバイスをいただくことが増えた。外部と別科教員としての関係性、留学生を受け入れる土壌が成立しつつあることを実感している。

一部の教職員から、来日時の指導は、先輩学生や日本人学生をチューターとしてお願いするのはどうかというアドバイスもいただいたが、実際に筆者がやってみて思ったことは、市役所や郵便局を訪問するには、まずは別科の教員が予めお願いに上がることが最優先であると考えている。別科とそれらの関係者との十分な信頼関係と連携がとれるようになり、留学生たちの自立を促すフィールドが確保できるようになった段階で、在学生やチューターにお願いするということが重要である。

## Messenger における日本語の変化

基本的に、筆者は学生に連絡をするとき、Messenger の文面は丁寧体で、筆者からお願いするときなどは簡単な敬語を使用している。できるだけ、文面をまねてもらいたいためである。(図 1、2)

また話しかけるときは、一気にたくさんの情報を流すのではなく、普段の会話のように話しかけて相手の反応を待ってから、重要な要件、その理由、最後に要件の確認という流れ



で、くわしくわかりやすく伝えるように意識した。例えば修理業者が来訪する際のメッセージは、相手に話しかけ、いつ来るかを伝え、なぜその日なのか理由を伝え、もしその日が無理なら別の日を業者に提案するよう促し、最終的に決まった日時を確認させている。その際、留学生の都合もできるだけ聞き、交渉の余地があることを示す。それによって、日本語で交渉するやりとりを体験させると同時に、学生が自分で日程を決めたため、約束をすっばかすような事態が避けられるのである。

初めの頃は、スマホのタイプミスが多かった学生も、次第に慣れてくる。留学生の場合は、普通体が多いが、Messenger においては、文法の誤用より、内容を伝えることを重視してきた。レベルによっては、ひらがなのみで入力していたが、どうやら彼らは翻訳アプリを使っているようなので、遠慮なく漢字も交え、しかしできるだけやさしい日本語で対話を続けた。

初級レベルの学生の場合、「はい」「ない」「わかりました」だけがやっただが、それでもスタンプ機能や「いいね」ボタンを押して、感情を表してくれる。また初中級レベル以上の学生は、次第に冗談を送ってくる学生もいたが、それは学校においても同様で、普通の会話の延長として Messenger で、冗談のやりとりを行うこともあった。特に会話が苦手な中国人留学生は、授業では口が重い Messenger では饒舌になる傾向があり、そのやり取りの延長から日常生活の会話につなげていくこともできた。文字のやりとりが、会話の練習にもなっていたのである。

これらの実践は、筆者が常に唱えている「正統的周辺参加」であり、アクター・ネットワーク理論である。外国人留学生が新参者として、地域の人たちと交流し、少しずつ日本社会へ参加していく過程である。その際に、市役所などの職員や教師、先輩留学生が古参として寄り添いつつ、自立へと促す役割を果たしている。また、留学生が初めて目にするヒト、コト、モノは、それぞれがアクターとして、留学生の生活と学習に大きく影響を及ぼしていると考えられる。

## 6. まとめ

「大学の教員／日本語教師なのに、そんなことまでするのか」。今回、多くの方からこのような言葉をいただいた。朝日大学留学生別科では、留学生専門の部署や職員がいない以上、誰かがしなければならない仕事である。それなら、自分の専門である日本語教育、異文化理解教育を活用して行ってみようじゃないかと思ったのが、今回の動機であるが、実際にやってみると奥が深く、いろいろな気づきがあった。「そんなこと」も、実は日本語教育であり、留学生教育であると確信した次第である。

生活指導に関して安易に数値化することはできない。今後もこれらの事象を筆者一個人の視点で記録を重ねながら問題点を拾い上げ、改善策としてひとつの指導方法を確立させていくつもりである。今回は取り入れることができなかったが、今後は留学生たちの声をアンケートやインタビューで集めていきたいと考えている。実際に、今年度後期で筆者が担当する口頭表現Cの最後の授業で、「この1年間を振り返り、来日当時の自分にアドバイスしたいこと」というテーマで学生にスピーチを課した。そこでも、前述の来日直後の不安

や不満が多く語られていたが、それとともに、当時の気持ちを教員と学生で、日本語で共有できるようになったということに、感慨深いものがあった。

最後に、冒頭で書いた「VS 問題がある留学生」という生活指導について言及しておきたい。滞在期間が長くなればなるほど、アルバイト先や同国人のネットワークなど別科では関知できない外部との人間関係が広がっていく。それは、留学生が日本で生活していく中で必要な人間関係であり、別科だけで彼らを囲い込むことはできないし必要はない。ただ、時には別科のルール・方針と外部の考えが一致しないことがある。前述の円を換金しようとした同国人の存在、他の日本語学校や専門学校の留学生たちからの口コミなどによって、ともすれば別科のルールに不満を感じることになる。「他の学校では〇〇なのに、どうして別科は…」自立して社会参加していく過程で、自分が所属する組織を客観的に見始める段階なので、これらの問題は避けて通れない。そこで「よそはよそ、うちのうち」の一点張りで指導すると、留学生たちは自分の都合がいい方向に流れ、時には別科のルールを逸脱していくことになる。これが冒頭で挙げられた「問題がある留学生」の「発生」である。「問題がある留学生」の多くは、来日前から問題があるのではなく、彼らの取り巻く環境や人間関係から次第に所属する学校との齟齬が生まれていった結果なのである。

それらを避けるためにも、来日直後の不安定な時期から留学生の声に常に耳を傾け、疑問や不安、不満をいつでも別科に言える環境を整え、一つひとつ丁寧に伝えていくことで、留学生からの信頼関係を築いておくべきである。留学生にとって日本語でコミュニケーションをとらないといけな煩わしさはあるが、困ったときにいつでも相談できる、彼らの人脈の中の1人として選ばれるよう、この来日直後から半年の間の対応は、留学生からの信頼を得るためには欠かせない業務であり、決して疎かにしてはいけない業務なのである。

現在は在籍する留学生のプライバシーを考慮し控えているが、将来は別科内で起こった問題に関しても、理論に基づきエスノグラフィーとして記録し分析していきたいと考えている。

## 参考文献

出入国在留管理庁 教育機関の選定について (2022年2月15日閲覧)

[https://www.moj.go.jp/isa/publications/materials/nyuukokukanri07\\_00024.html](https://www.moj.go.jp/isa/publications/materials/nyuukokukanri07_00024.html)

井上孝代・鈴木康明 (1994) 「留学生とカウンセリング (3) —留学初年度の生活指導におけるカウンセリング活動の意義—」東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 20 : 127-142

上野直樹・ソーヤーりえこ (2006) 「文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン」 凡人社

加藤浩・鈴木栄幸 (2001) 「7章 協同学習環境のための社会的デザイン」『認知的道具のデザイン』pp. 176-209, 金子書房

ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー (1993) 「状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加」(佐伯胖訳) 産業図書

- ブリュノ・ラトゥール (2019) 「社会的なものを組みなおす アクター・ネットワーク理論入門」(伊藤嘉高訳) 法政大学出版局
- 小田博志 (2010) 「エスノグラフィー入門〈現場〉を質的研究する」 春秋社
- 梶原綾乃 (2022a) 「留学生別科とは何か①-留学生別科から見た日本語教育-」 朝日大学留学生別科紀要 (第 19 号)
- 梶原綾乃 (2022b) 「留学生別科とは何か②-朝日大学留学生別科の 8 年間の生活指導-」 朝日大学留学生別科紀要 (第 19 号)

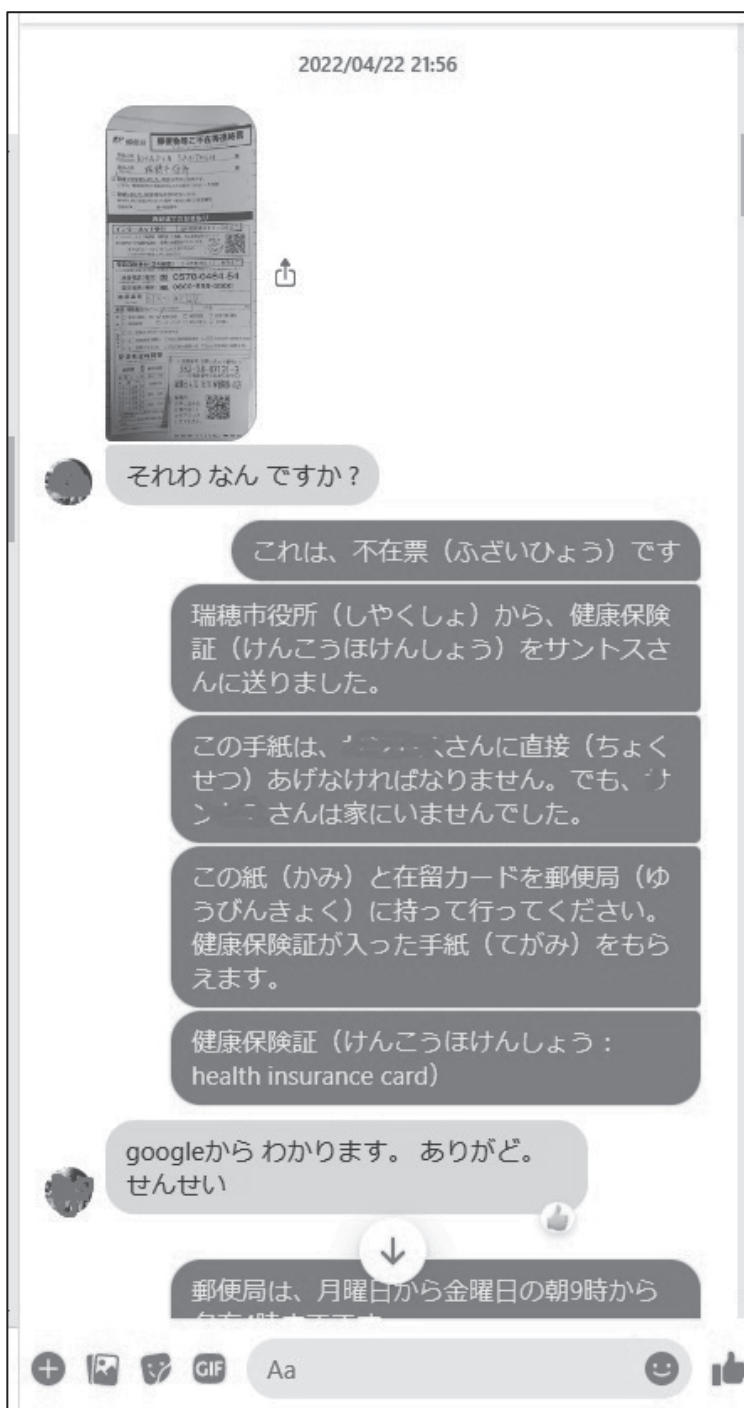


図 1 Messenger でのやりとりの様子①

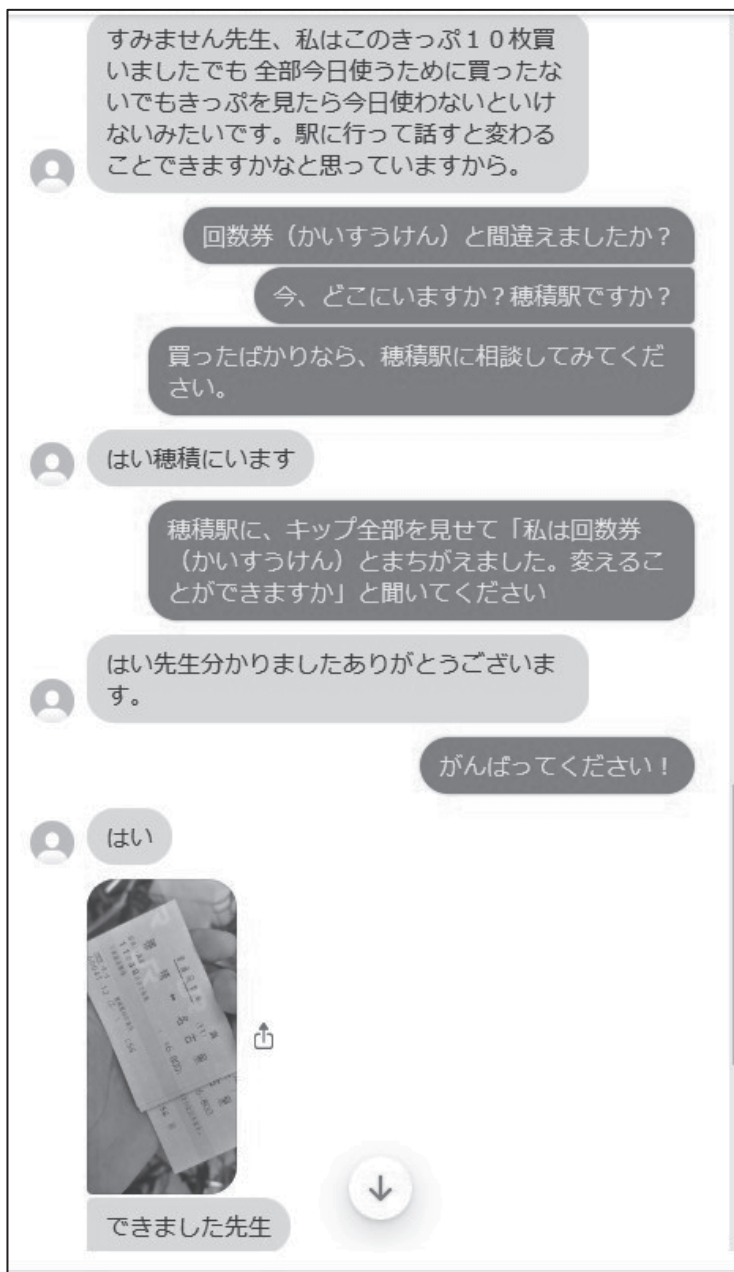


図2 Messengerでのやりとりの様子②